

平成 22 年 5 月 6 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520274

研究課題名（和文） 英米文学史におけるソネットの包括的研究

研究課題名（英文） A Comprehensive Study on Sonnets in the History of English and American Literature

研究代表者

桂 文子 (KATSURA FUMIKO)

龍谷大学・法学部・教授

研究者番号：00081084

研究成果の概要（和文）：

既刊第1集『ソネット選集 サウジーからスウィンバーンまで』（主に19世紀のソネットを扱ったもの）に続いて第2集『ソネット選集 ケアリーからコールリッジまで』（主に18世紀を扱ったもの）を出版した。さらに第3集『ソネット選集 ワイアットからハーバートまで』（主に16-17世紀を扱ったもの）の出版に向けて、第1稿を完成した。このように、ソネットの発展の軌跡をたどり、その結果、韻律構成とテーマにおけるイギリス・ソネットの独自性が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

We published in November, 2007, *English Sonnets from Carew to Coleridge*, a sequel to the first one from Southey to Swinburne, a collection of the original sonnets: the translation, notes and the lives of the poets, in April, 2004. At present, we have finished the first draft for the third series from Wyatt to Herbert. Through this perspective study of the history of English sonnets from 16th to 19th century, the originality of the English sonnets from the view point of prosody and theme has shown up itself.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ソネット、ソネット・シークエンス、16、17世紀英詩

1. 研究開始当初の背景

ソネットは、英文学史上重要なジャンルであるにも拘わらず、包括的な研究は未だ行われていない。

そもそもソネットは 16 世紀にイタリアからイギリスへ紹介、導入されて以来、17 世紀にかけて興隆した後、18 世紀を経て、19 世紀に再興隆し、21 世紀へと歌い継がれてきた。しかしながら、ソネット集の出版は数少ない。しかも、それらのソネット集の多くはエリザベス朝に限られたもの、あるいはせいぜい 19 世紀の Wordsworth までのものである。

全時代的にソネットを採録し、包括的に編纂、概観したものが出版されるようになったのもごく最近のことである。たとえば、2000 年に *The Oxford Book of Sonnets* (ed. by John Fuller, 2000) が刊行され、その翌年に *The Penguin Book of the Sonnet* (ed. by Phillis Levin, 2001) が旧版を改めて出版された。そこでは、従来注目されなかった 18 世紀の詩人や女性詩人が取りあげられて、ソネットに新たな光が当てられるようになったことが顕著に示されている。また、20 世紀の詩人たちのソネットが数多く採録されており、いかにソネットが時代を超えて詩人の詩才を刺激するかが窺われる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ソネット形式の詩作品全体を対象として、その歴史の変遷をたどると共に、変化のなかに変わらないソネットの本質をも明らかにすることにある。特に本研究では、今日まで等閑視されてきた群小詩人、なかでも女性詩人のソネット作品をも視座にいれ、これら傍流と主流との密接な関係を反映したソネット全体の見直しを目指す。

本研究は、イギリスでのソネット再評価の学術的動向に呼応して、わが国における本格的なソネット研究の確立を目指す。

具体的には、2004 年出版のソネット選集第 1 集に続き、第 2 集『ソネット選集 ケアリーからコールリッジまで』をまとめ、刊行することであった。

さらに第 3 集『ソネット選集 ワイアットからハーバートまで』の出版に向け、研究を重ね、原稿の執筆に当たる。

また、本研究の最終目的である、ソネットの本質を明らかにするソネット論集執筆に向けての準備をすることも目指した。

3. 研究の方法

本研究にあたって、具体的作業としては、まず、ソネットを共同で読んできた。各人が全作品の三分の一を担当し、精緻な読みと資料の分析に基づき、訳・注・作品解説を執筆。月二回の研究会に持ち寄った原稿を三人で検討、議論を重ねる。各作品に関して、少なくとも三度の議論を重ねた。

資料の収集にあたっては、代表者・分担者の所属大学図書館の利用のみならず、国会図書館、京都・法政・中央・上智各大学図書館に赴いた。また京都府立大学図書館において図書相互貸出制度も大いに利用した。

また、毎年、イギリスの大英図書館、オックスフォード・ケンブリッジ各大学図書館、あるいはアメリカ合衆国のハーバート、アマスト大学図書館、アメリカ国会図書館において、資料収集に従事した。アマスト大学フロスト図書館では五大学システムを利用して、マサチューセッツ大学、マウント・ホリヨーク女子大学、スミス女子大学、ハンプシャー大学所蔵の資料も検索、収集が可能であった。

以上の海外図書館では、とりわけ、ソネット詩集のさまざまな版、手稿など一次資料や、19 世紀以前の資料を収集でき、研究を深めることができた。

上記以外に、イギリスの大英博物館、ナショナル・ポートレイト・ギャラリーでは視覚資料を収集した。

4. 研究成果

イギリスでのソネットは、イタリアから輸入され、やがて花開く形式であるが、導入された当初から数多くの詩人がこの十四行詩という短い定形詩に関心を抱き、競うように詩作していたことを認識した。

ここでは、イタリア・ソネットの翻案に始まって、英語という言語に即したさまざまな韻律構成が、実験的に試みられ、その集大成としてのイギリス形式（シェイクスピア形）が生み出されていった。その名称に見られるように、確かにソネットに果たしたシェイク

スピアの功績は大きなものではあるが、他の詩人たちも数多くのソネットを残し、そこにはそれぞれの技巧が凝らされ、イギリス特有のソネットを完成させていったことが判明した。

またテーマに関しても、男女の愛に始まって、政治的・社会的・文化的なものへと広がりを見せたことが解り、そういったテーマの問題点についても考察した。

本研究期間の前半は、17、18世紀のソネットの研究にあたり、ソネット選集第2集の出版を目指した。この考察の結果、以下のことが解った。

この時代は、イギリスの近代化が進んだ時代であり、政治・経済・社会面における激動期であった。この時代を生きた詩人も時代の波と無縁に生きることはできなかった。

17、18世紀の詩は、ジャンルとしては叙事詩が流行した。それはギリシア・ラテンの古典的英雄を題材に据えたもの、あるいは世俗の事件、世人周知の事件などを諷刺し、何らかの教訓を垂れるもの、などが主流であった。事実、この叙事詩の名手である Pope はソネットを1篇も書いていない。叙事詩は諷刺なり、教訓なりの目的が明確で、かつ、確かな構成力が必要とされる。中庸を理想とし、感情面の抑制を旨としたこの時代が新古典主義時代、あるいは理性の時代といわれる由縁である。

ソネットという観点から英文学史を見ると、17世紀のソネット興隆から18世紀末のロマン派リヴァイヴァルと共に再び興隆するまでの間、一時的とはいえ、ソネットは消滅していたかに見える。しかし文学は急激な消長をするものではなく、ソネットもその生命を紡ぎ、脈々と伝統を伝えていた。その紡ぎ手は主として都会の政争を避けて田舎の自然を愛し、隠遁的な生活を送った詩人たち、あるいはもともと政治の表舞台からは疎外されていた女性詩人たちであった。17、18世紀は、女性作家、女性詩人が多数輩出した時代として特記されるに値する。

2007年出版の第2集『ソネット選集 ケアリーからコールリッジまで』で扱った詩人は21人で、以下のとおりである。

Thomas Carew, William Habington, Edmund Waller, Charles Cotton, Philip Ayres, Aphra Behn, Thomas Edwards, Thomas Gray, Thomas Warton, William Cowper, Anna Seward, Charlotte Smith, John Bampfylde, Mary Robinson, William Lisle Bowles, Helen

Maria Williams, Thomas Russel, William Wordsworth, Mary Tighe, Samuel Taylor Coleridge.

このうち、Milton、Gray、Wordsworth、Coleridge は、英文学史上、よく知られている名前であるが、今回ソネット史上での彼らの役割を確認できた。Milton は、その後の詩人たちが、ソネットを書くにあたって範としたほどの大きさを持ち、彼の荘重にして朗々たる語の響きに倣った Walton は自己の感情や歴史上の連想を伴う場所をテーマにして、ソネットを物した最初の詩人であった。単なる風景の審美的描写だけの自然詩では不十分であって、そこに意義深いもの、個人的な感慨や情緒が込められてこそ、ソネットたりうるのである。また、Milton は政治の面では、議会派として王制に対したことで、この時代のソネットと政治・社会との深い関わりを示す典型的な例となっている。エレジーで有名な Gray は感傷趣味に先鞭をつけただけでなく、ソネット形式における、さまざまな韻律構成を論じており、感性の時代の先駆けであった。次の Wordsworth、Coleridge こそは、まさにそのロマン派の旗手であり、個人の感情の吐露を旨とする作品の流行へとつながっていった。

第2集に収録したなかで、女性詩人は21命中6名で、ほぼ三分の一を占めている。彼らは恵まれた環境の許にあり、つまりは当時の女性としては珍しく高い教育を受け、結婚後、夫との死別や借金のため、生活が激変し、経済的理由から文筆業に入ったケースが多かった。散文から出発し、やがて詩作の道に入った。男性のソネットが、しばしば詩作の技を見せどころとするのに比して、女性の場合は、心情を表すことに重点がおかれ、それには、ソネット形式がまさに相応しいものであったことが窺えた。

これまでの文学史で看過されてきたことであったが、Helen Mary Williams が、Wordsworth や Coleridge に大きな影響を与えていたし、Charlotte Smith はソネット形式の復活に力があつた。彼女たちはシェイクスピア形式だけでなく、伝統的な枠を打ち破る様々な韻律形式を実践し、ソネットの歴史と発展に貢献した。

本研究期間の後半は、第3集『ソネット選集 ワイアットからハーバートまで』の刊行に向けて準備を進めた。この巻で扱ったのは、第2集に先立つ16、17世紀の詩人で、次の25人である。

Sir Thomas Wyatt, Earl of Surrey, Giles Fletcher, Edmund Spenser, Sir Walter

Raleigh, Fulke Greville, Lord Brooke, Sir Philip Sidney, Sir Arthur Gorges, George Chapman, Henry Constable, Samuel Drayton, Joshua Sylvester, John Davies of Hereford, Thomas Campion, William Alabaster, Barnabe Barnes, Sir John Davies, Richard Barnfield, Lord Herbert of Cherbury, William Drummond, Lady Mary Wroth, William Browne, George Herbert.

この時代の大きな特色は、ソネットの書き手の多くが宮廷人であり、彼らは政治家、でも軍人でもあり、文人でもあったことである。また、宗教界、法曹界に地位を占める人もいた。そういった背景のもと発展したソネットの研究の結果、明らかになったことは、次のようなことである。

宮廷を中心とした技巧を凝らした詩の丁々発止のやり取りには、宮廷、政治の場での地位争いの側面もあり、才知、教養等の見せどころでもあった。14行という短さゆえに、さまざまな制約があり、だからこそ力量があれば、複雑なことも深遠なことも盛り込め、かつ軽くも書けるというソネットは、才を見せる格好の手段であったからである。そこでは、詩人たちは相互にいろいろな形で繋がりをもち、その緊密な関係が、ソネットの普及と洗練に拍車をかけた。そこに当時の世界観、宇宙観、そして宗教観をも盛り込むこととなり、イギリスの独自のソネットを発展させることとなったのである。

当研究では、これまで等閑視されてきた群小詩人の中でも、女性詩人のソネットをも視野に入れることを目指してきた。定本とした選集にはただひとり Mary Wroth が取り上げられているだけではあるが、この時代には先駆的活躍をした女性詩人たちのいたことが、研究を重ねるにつれ解った。彼女たちは、その近親者のなかに、宮廷と関わり、政治的に活躍する男性のいたことが機縁となって、詩作に手を染めることになったのである。やはり、彼女たちの作品には、男性作品のように、政治的に才を見せるというような側面は少ないが、だからこそ、彼女たちなりの世界があるとさえ言えよう。

以上の研究は、引き続き平成 22 年度に採択された科学研究費補助金研究において、19 世紀後半から 21 世紀のソネット研究へと繋がりを、本研究の最終目的である英米ソネットの文学史的意義とその本質の解明へと結実していく予定のものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 11 件)

武田雅子、「英詩入門—いろいろな詩の形—」、大阪樟蔭女子大学論集、査読無、46号、2010、31-43

岡村真紀子、川島伸博、ロバート・パートン『憂鬱の解剖』第 1 部第 2 章第 1 節、京都府立大学学術報告 人文、査読無、61号、2009、67-99

武田雅子、Patrick Schwemmer、共訳の試み&その翻訳のプロセス(その 2) - J.F. パワーズ『お気に入り』の寝返り -、大阪樟蔭女子大学英文学会誌、査読無、45号、2009、31-60

岡村真紀子、「共和国のサムソン 罪人が英雄か - エセックス伯、アーサー・ケイベルの自殺 -、十七世紀英文学とミルトン、十七世紀英文学会、金星堂、査読あり、2008、251-270

桂文子、Robert Browning, 'Adam, Lilith, and Eve' - 男と女のドラマ -、英語青年、査読有、153 巻 7 号、2007、426-428

[学会発表](計 1 件)

武田雅子、Why Emily Dickinson Is Difficult to Teach in English: Challenges to Teaching Dickinson in Any Language、エミリー・ディキンソン国際会議シンポジウム[於：京都]、2007.8.3

[図書](計 10 件)

武田雅子他、Emily Dickinson s International Reception、Continuum Press、2009、100-139

桂文子、ロバート・ブラウニング研究 - 『パラケルスス』から『イン・アルバム』まで -、英宝社、2009、1-292

桂文子、ロバート・ブラウニング作『プリンス ホーエンシュティール・シュヴァンガウ 世の救い主』、英宝社、2008、1-213

岡村真紀子他 2、『ジョン・ダン 自殺論』、吉田幸子、英宝社、2008、1-385

桂文子、岡村眞紀子、武田雅子、『ソネット選集 - ケアリからコールリッジまで - 』、英宝社、2007、1-215

岡村眞紀子、『パラドックスの詩人ジョン・ダン』、英宝社、2007、1-295

6 . 研究組織

(1)研究代表者

桂 文子 (KATSURA FUMIKO)
龍谷大学・法学部・教授
研究者番号：00081084

(2)研究分担者

岡村 眞紀子 (MAKIKO OKAMURA)
京都府立大学・文学部・教授
研究者番号：80123488

武田 雅子 (MASAKO TAKEDA)
大阪樟蔭女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：30024475